

山下俊郎氏著

一人子の心理と教育

一人子が何かしら教育上ハンディキヤップをもつてゐることは、問題の子どもについて我々が「あゝ一人つ子ですか、道理で」といふ場合が大變多いことでもわかることである。とに角何かしら教育上問題となる一人子について本書は充分に周到に調べ、科學的に、しかも判り易く説いてある。

序に於て著者の言つてゐる「一人子の問題は單に一人子の親のみの問題ではない。理論的に言つても、また實際の教育の立場から言つても一人子の問題は同時に兒童一般の研究と教育に對して非常に大事な意義をもつてゐる」といふ主旨で一人子をあらゆる角度から研究されてゐる點、一人子を研究することによつてきようだといふものゝもつ環境を明にし、子どもの社會生活の問題に説き及ん

でゐる點、本書の特長であると言へよう。

教育環境學に就いての著者の造詣の深さは一人子の問題の發生、一人子研究の理論的及教育的意義の説明に於て、新鮮である。一人子の心理については心理學的にポハンノン、ネーテル兩氏の研究を主とし、又廣汎に亙つて文獻をしらべシユメーイングのリストをあげて一人子の問題性を示し、更に一人子の長所をも種々な研究を例にしてあげ、スタンレーホルルの「一人子であることはそれだけで一つの病氣である」といふ言葉はそのまま受け入れるわけにはゆかないとし、どうして一人子に問題の子どもが多いかを周到に検討してゐる點、一人子の爲に大いに同情的であるとも言へ、良心的であるとも言へよう。

斯う表裏、縦横から一人子を検討し、さて教育篇に於て一人子の教育について述べてゐるところを見ると、一人子の環境のうちには問題を發生させる條件が、その様な危険が多分に含まれてゐる。それを充分に理解し、問題に陥り易い危険か

らさなければならぬといふ冒頭の點に、一人子教育を二つの方面、即ち教養態度と社會生活の問題から考へてゐる。

教育態度として子ども自身を活動させること、獨立性の涵養、過重刺戟への警戒、訓練の確立、經驗の尊重といふこと、又社會生活の問題として一人子に缺けてゐる子ども同志の社會生活、子どもを教育するには子どもを以てせよといふこと等は、決して一人子にのみ重要な問題ではない。我々の深く反省させられる所である。そのあと一人子と幼稚園の項をよみ、最後に一人子の教育の原理として「經驗を尊重せよ、そして統制のもとに」「子ども同志の社會生活を尊重せよ」といふ結びをよんで、これ等すべては一般子どもに於ける原理でなければならぬといふ感じがしたのである。一人子の親は勿論であるが子どもを育てる立場にある人は誰でも讀んで置き度い書物であり、興味深くよめる本である。(清水光子)

東京神田駿河臺
刀江書院 五十錢